様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０５９１

研究課題名（和文）教科学習場面における言語少数派生徒に対する日本人生徒のスキャフォールディング

研究課題名（英文）Scaffolding for minority-language students by Japanese students in the support class

研究代表者
清田　淳子（KIYOTA, JUNKO）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：３０４０１５８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、中学校の国際教室で言語少数派生徒と日本人生徒が参加する教科学習支援を実施し、日本人生徒に「言語少数派生徒を助ける」という役割が期待されている場合、日本人生徒が言語少数派生徒をどのように支えるのかを追究した。分析の結果、日本人生徒は24種類のスキャフォールディングを用いて言語少数派生徒の内容理解を深め、発言を促し、学習意欲を喚起していた。さらに、日本語学習言語や教材文理解のモデル、問題解決の仕方を示すなど、日本人生徒には「学びの支え手」としての可能性が認められた。

研究成果の概要（英文）：　In this study, learning support in which minority-language students and Japanese students participated was implemented in junior high school international classes with the aim of gaining an understanding of the scaffolding Japanese students use to support the learning of minority-language students in a situation when the Japanese students are expected to "help the minority-language students".
The results of the analysis revealed that the Japanese students used 24 types of scaffolding to deepen the minority-language students' understanding of the content, encourage them to speak and arouse their desire to learn. The potential of Japanese students as "learning assistants" who display models of Japanese learning language and teaching material sentence comprehension and present methods of solving problems through their own learning activities was observed.

研究分野：人文学

キーワード：年少者日本語教育　教科学習支援　日本人生徒　スキャフォールディング

１．研究開始当初の背景

日本社会の急速な国際化や法律の改正に伴い、「言語少数派の児童生徒」（外国から来て日本で暮らす、日本語を母語としない子ども）が増えている。子どもたちはできるだけ早く日本語を習得して在籍級の授業に参加することが期待されるが、教科学習場面で要求される日本語の習得には長い時間がかかる（Cummins1984）。

海外の先進的な取り組みでは、ESL 生徒が教師と同級生に支えられながら在籍級に浸かることの重要性が指摘され、在籍級における ESL 生徒の学びをどう支えるかの研究実践が積み重ねられている(ハモンド 2009)。しかし、日本におけるこれまでの研究は言語少数派生徒自身の力量形成や教授法の開発、教師の指導法の工夫に主眼が置かれ、「教師と同級生に支えられながら」という観点からの追究は十分とは言えない。ここ数年は在籍級教師による授業設計の工夫や入り込み支援の充実など「支え手」側に着目した研究も報告され始めているが（桜井 2008、清田 2011 など)、同級生が支えることに焦点を当てた研究は管見の限り見あたらない。

そこで本研究では、教科学習場面における日本人生徒のスキャフォールディングの様相を明らかにすることを通して、同級生が支えていくこと可能性を追究する。

２．研究の目的

本研究では、日本人生徒と言語少数派生徒が参加し、日本人生徒に「言語少数派生徒を助ける」という役割が期待されている学習支援を対象に、研究課題(1)～(3)の検討を通して、日本人生徒が言語少数派生徒の学びを支えていくことの可能性を追究する。

(1) 日本人生徒はどのようなスキャフォールディングを用いて言語少数派生徒の内容理解を促しているか。
(2) 学習支援を行う日本語支援者は、日本人生徒のスキャフォールディングの獲得や発揮をどのように導いているか。
(3) 学習支援に参加する言語少数派生徒と日本人生徒は、学習支援に対してそれぞれどのような意識を持っているか。

３．研究の方法

学習支援の実施及び参与観察は横浜市の中学校に協力を求め、以下の項目について継続的に資料を収集し、分析を行う。

(1)中学校の国際教室で、言語少数派生徒・日本人生徒・支援者による学習支援を実施し、参与観察を行うとともに、教室談話データを収集する。
(2)学習支援に参加した言語少数派生徒と日本人生徒、及び支援者に対して半構造化インタビューを行う。

４．研究成果

本研究の成果を、「２，研究の目的」の項に示した 3 つの研究課題に沿って示す。

(1)「日本人生徒はどのようなスキャフォールディングを用いて言語少数派生徒の内容理解を促しているか」

日本人生徒は 24 種類のスキャフォールディングを用いて、言語少数派生徒の教材文の音読や内容理解を支えていた。また、言語少数派生徒の言語行動にフィードバックを行うことで理解の深化や発言を促したり、学習意欲を喚起していた。同時に、日本人生徒は自らの学習活動を通じて日本語学習言語や教材文理解のモデルを示したり問題解決の仕方を提示するなど、「間接的な」スキャフォールディングを行っていた。以上のことから、日本人生徒は言語少数派生徒の学びの「支え手」になる可能性をもつことが認められた。

(2)「学習支援を行う日本語支援者は、日本人生徒のスキャフォールディングの獲得や発揮をどのように導いているか」

支援者は日本人生徒に対して、言語少数派生徒の理解を促すには何を・どのように教えればよいのか、望ましい足場のかけ方を明示的に説明していた。また、支援者が足場のかけ方を実際にやってみせることで、日本人生徒はそれを見てまねることから入り、多様なスキャフォールディングを実践していったこともうかがえた。

二つの分析結果からは、日本人生徒が言語少数派生徒の学びの「支え手」になるには、日本人生徒がスキャフォールディングの仕方を学んでいくこと、学んだスキャフォールディングを使える場があること、そして日本人生徒に足場のかけ方を教える者がいること、という三つの要素が必要であることが導き出せる。そしてこのことは、言語少数派の子どもの教育を考えるときには、学校の教室で共に学ぶ日本人生徒をどう育てるかの視点も併せて求められることが示唆された。

さらに、日本人生徒の側の学びとして、より高次のレベルの＜わかる＞に至る「わかり直し」（佐藤 2012）を行っていること、メタ言語能力の養成、そして、「わからない時は他者に助けを求める」という学び方があること、すなわち「他者を信頼し、他者に援助を求める能力」を体現していることが見いだせた。

(3)「学習支援に参加する言語少数派生徒と日本人生徒は、学習支援に対してそれぞれどのような意識を持っているか」

言語少数派生徒にとって日本人生徒と共に学ぶ学習支援は、第一に、学びを深める場であった。すなわち、背景の異なる生徒がそれぞれに発言し、それを聞き合うという学習のあり方は、言語面の課題を克服するだけでなく、自身の考えた答えや意見の質を向上さ

せる場でもあった。第二に、＜日本人は助ける役割で外国人は助けられる存在＞という固定的な関係ではなく、学習支援の場は助け合う関係を醸成する場であった。第三に、言語少数派生徒は日本人生徒との関係を築いていくうちにより強い学習意欲を自覚するようになり、それは学習の継続性へと繋がっていった。

外国人生徒は在籍級の一斉授業の中では日本語のみの授業についていくことができず、「お客様」状態になりがちである。2 名の中国人生徒はこの学習支援の中では、日本人生徒、フィリピン出身の生徒といった異なる背景を持つ者と学ぶこと、また、そうした者との関係の中で学ぶことの可能性を見出すことできた。

一方、日本人生徒においては、言語少数派生徒に対する関わり方に積極性が増し、「何人（なにじん）とかは関係ない」という対等性の意識がうかがえるようになった。また、学習支援は「詳しく、深く追究して学べる」場であり、それを「楽しさ」と評価しており、言語少数派生徒と日本人生徒との間に教材の内容理解という共通の目標があった点が日本人生徒の肯定的な意識を促したと推測された。

さらに、現在、中学校に在籍している言語少数派生徒たちのみを視野に入れるのではなく、今後も入学してくる生徒たちのことも案ずるようになった。つまり、言語少数派生徒の抱える困難は、目の前にある一過性のものではなく、今後も続くものだと想像することができるようになっていた。そして、そのためには、自分たちはもちろんのこと、日本人の後輩たちが支援を受け継いでいかなければならないとしている。「(言語少数派生徒の存在に)興味をもってほしい」という一言は、言語少数派生徒の言葉を代弁していると言えよう。

(4)「学校と大学の協働支援体制作り」

(1)～(3)に述べた知見を得るためには、学校と大学の協働支援体制が必須である。ここでいう「協働支援体制」とは、「大学は研究もしくはアドバイザー、中学校は実践」という色分けを持たない。すなわち上述の学習支援においては、大学支援者自らが母語翻訳文を作成し、子どもの母語力や日本語力に応じた学習課題を用意し、毎週の学習支援を大学支援者が行い、年度によっては中学校教員や地域の支援者と協働して行った。

三輪(2015)は、このような協働支援体制を軌道に乗せるまでの、関係者たちの意識や葛藤、それらを乗り越えるための具体的な行動について検討した。分析の結果、学校側は主に、①学校に入ろうとする人達が「教室実践に寄与する人達か」「安全面、生徒のプライバシーを守る人達か」「学校の希望を理解し共有できる人達か」という 3 つの見極めを持てないでいること、②教科学習支援に母語を用いることに対して葛藤を持っていることがわかった。

このような葛藤に対し、大学支援者は、子どもとよい関係を築くこと、そのためには子どもの教科理解が深まるように教材研究・指導の工夫をして支援を実施すること、そして、学校教員に対して支援をめぐる情報の公開に努めたところ、子どもの「(勉強が)わかった」という変化を通して、学校の信頼感を醸成していることが示唆された（清田他 2012)。また、中学校教員と共に実践するスタイルや情報公開・情報発信は「（大学は）研究のために現場を利用するだけ」という不安の軽減にもつながった。

一方、学校が外部の支援団体を受け入れるためには、学校側に窓口となる専属の担当の存在が必要であった。生徒の実情がわかり、在籍級の教科担当者や管理職ともコミュニケーションの取れる教員が専属の担当者となることで、支援の日程調整や教材選定、対象生徒や在籍級担当者への連絡が円滑になるだけでなく、生徒指導上の問題が生じたときの対応を速やかかつ適切にとることが可能となった。

以上、協働で支援を行うためには、まず入り込む側である大学支援者が学校教員の持つ懸念や葛藤を払しょくする努力が必要であり、受け入れ側も、支援受け入れ態勢を整える必要性が示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①宇津木奈美子、「言語少数派の生徒を対象とした学習支援に参加した日本人生徒の意識に関する報告」、『平成 24～26 年度科学研究補助金研究成果報告書（基盤研究(c)）教科学習場面における言語少数派生徒に対する日本人生徒のスキャフォールディング』、査読無、巻数無し、2015、31-43

②清田淳子、「教科学習場面における言語少数派生徒に対する日本人生徒のスキャフォールディング－小集団で行う学習の場合」『平成 24～26 年度科学研究補助金研究成果報告書（基盤研究(c)）教科学習場面における言語少数派生徒に対する日本人生徒のスキャフォールディング』、査読無、巻数無し、2015、1-30

③高梨宏子、「学習支援に参加した中国人生徒の意識に関する報告－日本人生徒とともに学ぶ学習支援の場合－」『平成 24～26 年度科学研究補助金研究成果報告書（基盤研究(c)）教科学習場面における言語少数派生徒に対する日本人生徒のスキャフォールディング』、査読無、巻数無し、2015、44-56

④三輪充子「中学校教員と大学関係者が協働支援体制を構築するまで－９年間の協働実践の事例を通して－」『平成 24～26 年度科学研究補助金研究成果報告書（基盤研究(c)）教科学習場面における言語少数派生徒に対する日本人生徒のスキャフォールディング』、査読無、巻数無し、2015、57-65

⑤清田淳子・宇津木奈美子・三輪充子・劉雲霞・土屋隆史、「中学校における母語を活用した学習支援の持続可能な展開に向けて－学校と大学の７年間の協働実践をもとに－」、2012 年度日本語教育学会国際大会（名古屋大学）予稿集、査読有、第 2 分冊、2012、78-79

〔学会発表〕（計 1 件）
①清田淳子・宇津木奈美子・三輪充子・劉雲霞・土屋隆史、「中学校における母語を活用した学習支援の持続可能な展開に向けて－学校と大学の７年間の協働実践をもとに－」、2012 年度日本語教育学会国際大会パネルディスカッション、2012 年 8 月 18 日、名古屋大学（愛知県名古屋市）

〔その他〕
研究成果報告書『教科学習場面における言語少数派生徒に対する日本人生徒のスキャフォールディング』(116 頁)の作成

６．研究組織
(1)研究代表者
清田　淳子（KIYOTA JUNKO）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：３０４０１５８２

(2)研究分担者
宇津木　奈美子（UTSUKI NAMIKO）
帝京大学・帝京スタディアブロードセンター日本語予備教育課程・講師
研究者番号：９０６２５２８７

(3)連携研究者
(無し)

(4)研究協力者
高梨　宏子（TAKANASHI KOUKO）
三輪　充子（MIWA MITSUKO）
土屋　隆史（TSUCHIYA TAKAHUMI）